

戸田平和記念館（旧英国七番館）における 耐震補強工事について

創価学会戸田平和記念館 加藤 篤志

はじめに

戸田平和記念館は、もとはイギリスのバターフィールド&スワイヤ商会の建物で1922（大正11）年に創建された。翌1923（大正12）年に起こった大正関東地震によって甚大な被害を受けたが倒壊は免れ、震災前から残る外国商館として希少な遺構となっている。旧外国人居留地の外国商社の建物は、かつては所在する番地と国名を組み合わせる英国一番館（居留地一番地にあるイギリス商会の意）などと呼ばれており、この建物もその習慣にしたがって長らく「英国七番館」と呼ばれ続けた。

1976（昭和51）年に創価学会が取得した後、創価学会神奈川文化会館の建設計画にあたり横浜市との「山下公園周辺地区開発指導構想」に基づいた協議の結果、当初の建物の海側およそ3分の1を維持・保全することが決定した。その後1979（昭和54）年に、かつて創価学会戸田城聖第2代会長が横浜市三ツ沢の地で「原水爆禁止宣言」を発表した歴史の意義を留めるべく「戸田平和記念館」として開館し、現在までに50を超える平和をテーマにした展示会を開催している。

この建物は鉄筋コンクリート造による様式建築の比較的早い時期のもので、開口部などの要となる部分に石を使い、他をレンガ張りとしたいわゆるフリー・クラシック様式をとる。2階の左右を出窓とし、中央に入口を設けた左右対称の記念碑的なファサードがかつての外国人居留地のバンド



図1 英国七番館時代の外観。

（海岸通り）の面影を今に伝えており、その景観的価値から2001（平成13）年に「横浜市認定歴史的建造物」に認定された。

耐震補強工事にあたって

今回の耐震補強工事は地震による倒壊のリスクを軽減するのはもちろんのこと、横浜市の認定歴史的建造物として「歴史を生かしたまちづくり要綱」に基づいた改変、さらに展示会施設としてバリアフリー化などの課題を考慮し、その設計主旨を「建物の歴史的価値の継承及び耐震性能を確保し、誰もが利用しやすい施設に改修する」とした。

その上で、設計方針を「1. 歴史的建造物である外観を保全したまま、耐震補強をおこなう」「2. バリアフリー化をはかり、誰もが利用しやすい建物とする」「3. 耐震補強及び外観保全について横浜市の助成金交付を受ける計画」とし、耐震補強工事にあわせて外壁及び屋根の補修、そしてエレベーター、自動扉、外部スロープを新設することで、美観及び利便性の向上を同時に目指すこととした。

構造設計の条件と方針

事前の現地調査の結果、既存建物は鉄筋コンクリート造とレンガ造の混合構造であることが判明した（図2）。ただし鉄筋コンクリート内部において鉄筋は存在するものの、間隔は非常に大きく、館内においては鉄筋コンクリートの柱と梁は存在するが外周部に鉄筋コンクリートの柱は見られないなど架構形式は不明であった。

加えて外観保全を前提にした工事であることから、既存躯体を直接補強するのではなく既存の開口部に合わせる形で建物内部に鉄筋コンクリート造のフレームを設け（ラーメン構造）、既存建物に作用する地震荷重をすべて新設フレームに負担させることにより耐震補強を行う計画とした（図3、4）。また既存2階床及びそれを受けている鉄骨柱は解体せずそのまま利用した。基礎はべた基礎を採用し、新設フレームの荷重を分散させて地盤

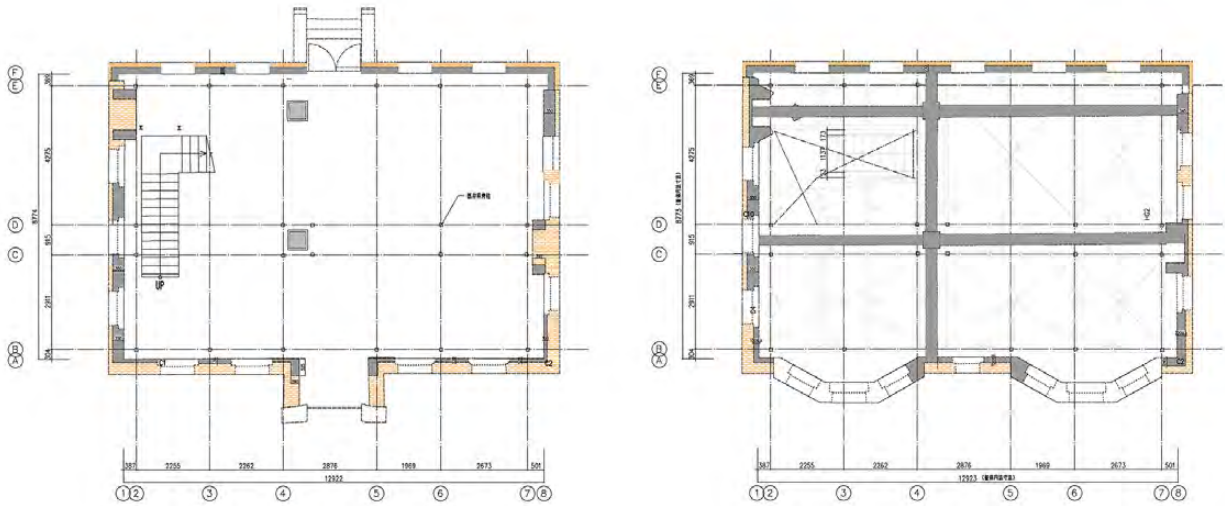


図2 現地調査時の図面. 外側がレンガでその内側が 鉄筋コンクリート壁の混合構造となっている.

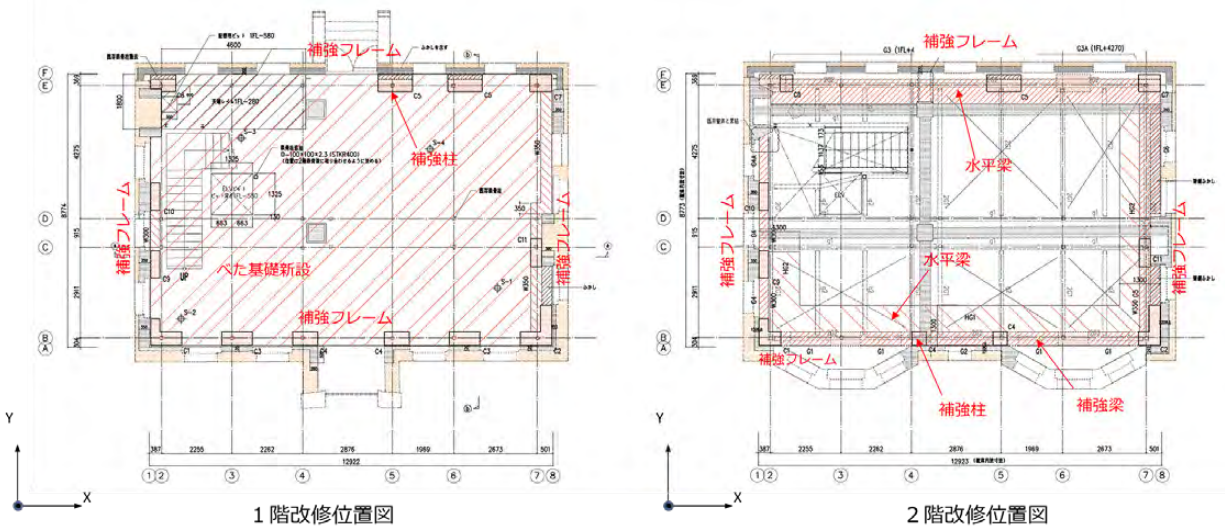


図3 改修位置平面図

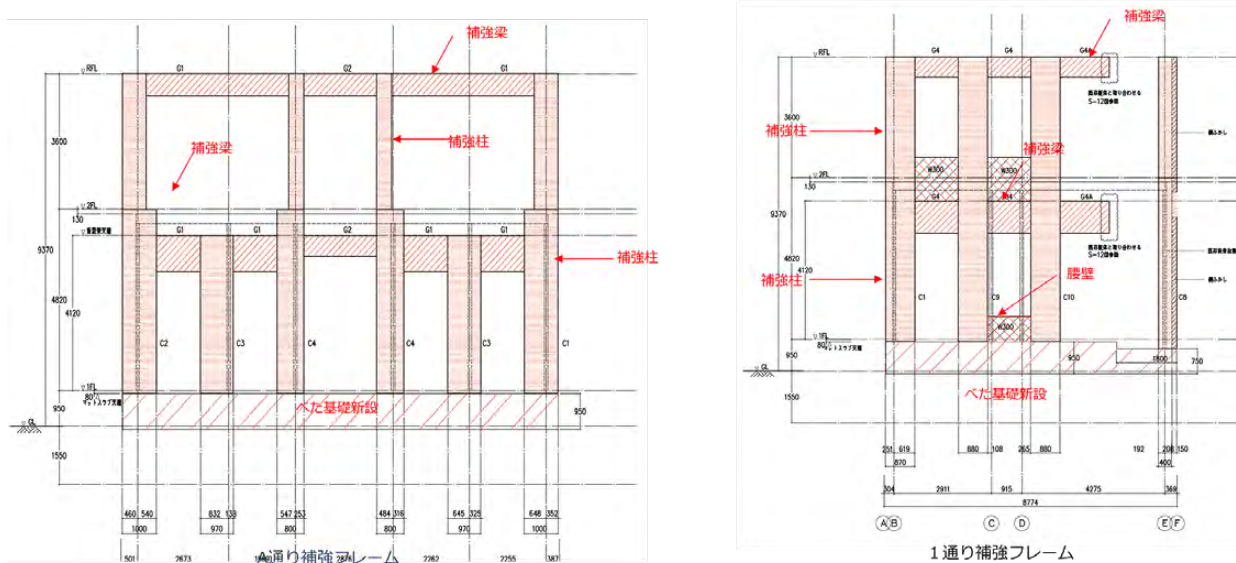


図4 改修位置立面図

に伝えることで、既存建物基礎への影響を小さく
するよう配慮した。その上で耐震性能については、
耐震診断基準ではなく建築基準法を満たすレベル
を目標とし、保有水平耐力が必要保有水平耐力を
上回ることを目標とした。

工事の様子

2023（令和5）年6月から翌年2月末までの期間
で、以下の通り耐震補強工事と屋根改修並びに外
壁保全工事を実施した。



図5

(1) 耐震補強工事

- ①1階土間スラブにカッターとコアを入れ解体し既存床を搬出（図5）.
- ②耐圧盤を施しコンクリートを打設（図6）.
- ③立ち上がり配筋完了（図7）.
- ④型枠建込（図8）
- ⑤柱・梁型枠完了（図9）.
- ⑤コンクリート打設（図10）
- ⑥耐震補強完了（図11、12）.



図8

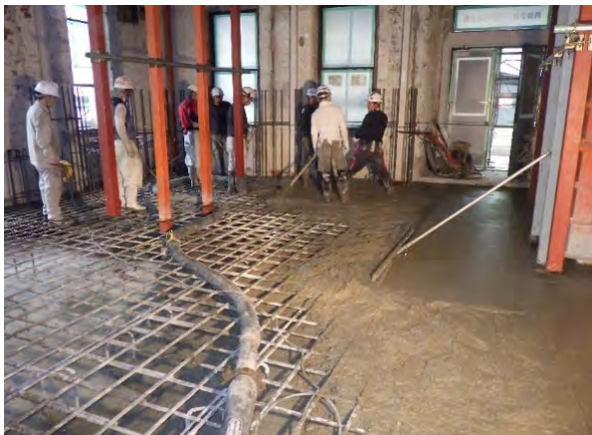


図6



図9



図7



図10



図11 耐震補強完了時の1階.



図12 耐震補強完了時の2階.

(2) 屋根改修工事

既存屋根を残したまま新しい金属屋根を設置するカバー工法で施工。既存屋根に下地と断熱材を施工し（図13）、金属板葺き工事を実施した（図14）。



図13

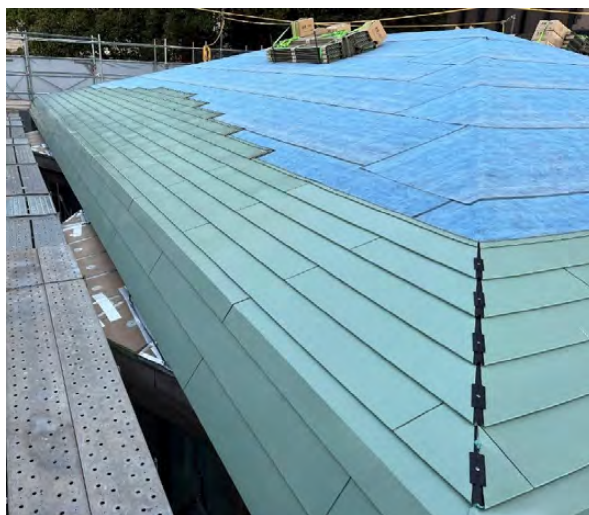


図14

(3) 外壁保全工事（レンガの欠損補修）

- ①欠損個所のレンガ回りの目地にカッターを入れ、40mmレンガを研る（図15）
- ②新設用スライスレンガを墨汁に染めて色合わせをする（図16）



図15



図16



図17

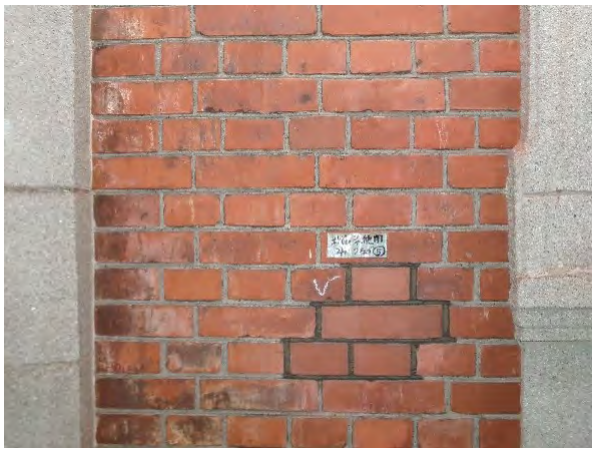


図18

- ③外壁に接着剤を塗布し、スライスしたレンガを貼る（図17）
- ④目地詰めをして完了（図18）

(4) その他の工事

バリアフリー化をはかるため、エレベーターならびに外部スロープを新設した（図19、20）。



図19 エレベーターを新設.



図20 裏側出入口にスロープを新設.

歴史的建造物としての改変

今回の工事では旧英国七番館としての資料の提示手法も新たにし、歴史的建造物としての文化的価値をより来館者とシェアできるようになった。

1点目が館内の一部を創建時のレンガを表した仕上げとしたことである（図21、22）。これらは実際に触れることができ、また各レンガ脇には説明パネルを設け来館者が創建当時の建物をイメージできるよう心がけた。併せて今回の耐震補強で設置したコンクリート躯体を一か所表した仕上げとし、建物の履歴が見られる設えとなっている（図22）。

2点目が外構を整備し、これまで植栽によって半分以上隠れてしまっていた英国七番館時代からの門柱（図23）の視認性を高めたことである。また門柱までのアプローチを確保し、より建物に接近して写真撮影ができるなど歴史を身近に感じられるようになった（図24）。

これらの改変はいずれも建築工事を伴うため大規模な仕様変更であり、耐震補強工事と同時に実施できたことは幸いであった。



図21 正面入口両側に表した創建時のレンガ。



図22 同じくレンガを残した館内の一部
(中央が今回の耐震補強躯体)。



図23 改修前の外構。
門柱の大半は植栽に隠れてしまっていた。



図24 改修後の外構。

おわりに

耐震補強工事によりリニューアルした戸田平和記念館は、今後も創価学会における平和運動の一環としての展示を継続していく方針であり、(図25) バリアフリー化されたことで来館者の利便性を大きく向上することができた。また、今後発生が懸念されている大型都心南部直下地震により想定される「最大震度6弱」に十分耐えうる構造を実現できたことは、来館者を受け入れる上で何よりの安心材料である。

同時に戸田平和記念館は、旧英国七番館として地域や社会にとっての文化資産でもある。その文化資産を損失のリスクから確実に守るとともに、資料としての価値を高め未来へと継承していくことは、その土地の歴史や文化を活かした地域社会づくりに資することといえよう。今回の耐震補強工事を経て、戸田平和記念館が今まで以上に市民に親しまれ、さらに生涯学習・社会教育においても多世代の人びとに利用していただけることになればこれ以上の喜びはない。



図25 リニューアルした戸田平和記念館の外観。